

掌中蓼太鼓句集

初編

全

70

1

2

3

4

5

6

7

8

9

80

1

2

掌中蓼太發句集初篇

春之部

歳旦

元日やう所のあも作勢能海  
隆印より掃くも元辰けさ乃春  
榮於ぬ松こそけきそ所祝  
萬分よの又者盤なり初のそ  
万々や愛八橋り破くぞ

又日の風枝とさきくさぬは若う代の暮と  
むくくくくくくくくくくくくくくくくく

初冬や十日と集巻のころそをく先

人日

摘まきくくくくくくくくくくくくくくく

のくお賣ぬ代ゆくくくくくくくくく

乳蒙如風とさきくくくくくくくくく

洗う尻とも髪を穿たをの若菜か

子日

は君くくくくくくくくくくくくくくく

梅

む免咳やくさくくくくくくくくくく

梅枝かくくくくくくくくくくくくく

せりうくくくくくくくくくくくくく

社民

梅香や風み百分の白らうく

紅梅や群のくくくくくくくくくく

紅を縁ちまきく 梅の ちんぱり

鶯

うらひまきの五ツ福りく 初音は  
鶯の ね鳴きまきく あらまけり

老鶯巢

鶯居くく 鶯の 顔見まきく  
鶯の ね鳴きまきく ねねくく

柳

二月三月 鶯吹入 柳やねさう那  
ゆりかきく 小枝もまきく 柳うま  
水庭へ 鶯の 這入く 春をまきく  
柳の ね鳴きく 柳の ね鳴きく  
鶯の ね鳴きく 鶯の ね鳴きく 柳の

鶯

洛陽 鶯の ね鳴きく 鶯の ね鳴きく  
うすまきく 子やまきく 鶯の ね鳴きく

蕪園

惟との序先遊々々  
春風

夕霞散多々々鼓々々

春月

又六丈灑頂る月秋う那  
折ふ一の樹もをし終月  
麻もよく森々終る素良月

猫魚

換ふむ秋半もあへし終この魚  
濡たうを魚とこくふ猫の魚

淡雪

淡雪や倒う々々喜々日山  
淡雪の降をうりり是去年の雪

春風

春風や一度千起る雪の外

春雨

雪のぬれく啼たり 春の返  
双六と返も春何りともお 返  
まゝもや括るものふハ義をうり

大井ふく

三井寺に鐘きくまの返歌六

陽空

陽空に梯よせてある屑火うな

濱松犀崖

岩崩平塊くくけく 桂う那

風中

きれ几中再をあら次戸のゆふく

海苔

まゝ海苔せとくけて白し磯の波

紫根

陰壁初く人城笑ふ花をく福山

雛子

綿木よその尾まゝる糸雛の糸  
糸を忘はる徳船よ雛のあはる糸

涅槃

祿をん余やおふれて初より飛如蝶

葵

とちりかゝり化しそく禿よ燕と

雲雀

朝風やきく一まちよわけ雲雀  
雲の川勢よ飛降くまひをり糸

萱子

まゝの子や余多ふ愧を退まらう

蝶

蝶くや乞食の憂れうのうき  
片まむりと砂味嘴を逝る如蝶

蛙

修徳の抱はるるや晴かきり  
後室の敷くみえる蛙うれ

董野のま

そとくひく牛もあつうー董草

春屋

喜此日や門申く梵編の親法海

八摺

杖まろく春やむろーの橋まら

大磯

祐成り燈ろー喜の衆的りか

苗代

秋風孤二ふふ多ろー苗代田

離

拙様白髪の離もあろまねし

消く家燈もなほろー秋の離

系解



きしち膚も女ちうりけり葉かみ餅  
下葉の穂こたるみれは遠もち

汐子

胸り透る女ち後の汐干る

出代

出くもまやほれへまきく大男

花

おきくとおせきく花のちる

是れちふら〜はま〜は〜花の陰

身ふ〜して青空花のぬねう那

芝居皆やまむてもね〜花盛

芳野

あ〜雲やちる時花のよう〜山

禁よ登りりり

め〜〜や芳野と下りて花一本

花吟ふ能も乃ほるねよ〜の川

芳野大游

らる花とめつめて流のこころ

苔清あ

苔清あ花うさうけて結ひりり

初歌

むう雅被るもてや暮の花

様

世の中を三日見ぬるみ様うま

我宿の様うまれてらるる

割あまふ旅の介とさううれ

あさ乃と又奥よせん様かり

志もくく芳野の山中よとまうらる

比名あるあくの花即くは阿比め

武印の洞友のりくう又あひとて

ひらうらるるうま様う那

岩りくく是とらるるやゆめ様

年高き若きもあやも山はら

海棠

海棠やおくれそまてもやうこめ

海ともや花の中よるとうすぬ紫

躑躅

旅笠屋の夕られあふはし

若報

若報の緒きしのゆる物日うれ

あふくも弱のひまの小報え

友

投うけきたのむ色ちうり松耳友

立されえやうこゆらるし友の花

行春

夕言花落るやまのこまうりより

ゆくまやこらへ渡分殿田の橋

あま春う笠きてけいんて申く

夏之部

更衣

袴部より出ぬる者一更衣  
我より後ぬる者一更衣  
武士結糸とせよとて給ふ

白重

白重とて程名も髪や白くも  
白くもぬ少くも春中より物かへん

郭公系小て 嵐山小く

若くもめまや滞ひし人かきき  
二のたうも子と花たうりかたがす

箱根

雲碯く一字目もまき一はるたす  
かききす 鳴や氷室乃 一帯  
をもちうと藤くとのまおあきす  
かききくまもあきすや 郭公

やうき果と蹴落して出る旅  
一とせふこの月見やはゆくき  
木鳴して又抱あふはんとす  
世と踏む能ふ位も乃そ海は郭と

灌佛

山寺や又色よあまる花の堂

牡丹

月と影と河 影と牡丹の所より

横らる果や不めん乃雪丸け  
花とやうと西不しあぬ牡丹と

葵祭

あふ傍る木のうとそを徳う

嬰粟

あけけけの續くくめきお秋

麦秋

乞食せん世とあうう舟とこり麦

旅孫してあるや麦も秋の暑  
麦の穂も出揃ふ卯月八日哉

笋 鯉

牛の子や花ちりさとの男も  
うれあめら花ふくさしし初このか

鄭

惟よまう宿りしはちと秋節  
津のらふ伯母よこりては鄭の歴

花柚

惟光とふまへくもは花柚哉

下園

下園よ乾ぬ園伽はちのく

身延

け山の茂や妙忠一字より

宇津山

若ふ乃智くそ哉るちけりり

蒹葭 水鷄 翡翠

うきうきもあはれきりて 次へあはれ  
日やけ田よ水門たぐく 水鷄が  
屋よりきりの花をく 蓮より翡翠が

新茶 梅の尾

唐土のさひくくさんせき新茶が  
あはれくく洛よあはれく

嵯峨の葉もあはれきりて 洛の新茶が

余呼ぶ

我もあはれきりてあはれきりて  
竹まき一本まき一本あはれきりて

螢

うきうきもあはれきりて 虫の螢が  
返さくハ月よりあはれきりて  
端午 懸波はきり

懺見の果もあはれきりて 帆然船

百煉鏡

煉うけく鏡著りり又日月

競馬

翠葉簾越の浪ふ落りんく魚る

魚摺の石を為る

えてのこやいさ帷子よふのふすり

又月雨

又月ぬやわる秋むとるま雲の月

秋ぬせめくけくく飛ちりありぬ

川越る日もありやうや鼻月ぬ

多し初川を停勢徳那の二非もいぬ  
まらんえたうふ雨とくやまふ森ぬの夕  
晴もいれ

紀の月ふ多し初川や鼻月ぬ

田植 佐吉作田

乳ちお作おは田の乙女つとくくより川  
井の志せのうらとちるもちりうこま  
よりうらとち

新苗やりの成りうこま方の志らくこ



二尺橋のふりより二層を踏し山岳其  
上田云及味晴八斗小共即よりよあ  
よふ所とある孫師のねをとおひ出さ  
そこふ商家の名なりたりしれえ

玉苗如門田持けりいくよ候  
山陰や人目あひそそ 甲うくう

田草

山部より脊中ふきう田草を  
おいとぬ夫婦ちうりり田草を

若井 鴉子

とらうかうはくそを麻糸今逢井  
鴉子ういやま子よ儂子ふあひ  
つのもも鴉やまをまお鴉も木のま

敷巻 紙怪

まうとまら森ぬ里の敷甲うれ  
敷巻火やうくあはしくも 松の月

紙王寺

尼寺や粉白粉も蚊取り草

多所

蚊の居ぬも浮世の外そ花の月

我座と紙帳ふせと雲うよや

業平の知る居るも紙帳くれ

其夏

菊作る思業の外や美人草

志のころころのや葵の又六月

花うらむと花うらむ

里人よと手れらさとも花うらむ

小秋中山

雲陽花や襟あはれあはれ

紀州親あはれ

荒磯や梅子あはれ親あはれ

秦徐福古墳

梅子結唐也や平と平塚浮りぬ

氷室 紙筆會

六月に水もさくまきこり那  
夜を今や葉を日かきの下どり

竹婦人 簞 蚤

まをよりありひそめたり竹婦人  
曉を小町うほねや下婦人  
物装ふ風をまきられまきりひり  
客胸りふん送る葉のり葉か

園庭 扇

あのみふらうらとまふや小形城  
極つけの田つらんまき園庭  
庭間の跡を扇かめ  
いとけかき子よとれらる扇をま

清水 狂り柳

初とまきひ腸流し流あう那

自得

晒月をを措まり月日う那

暑 西涼

夏月

龍虎藏ももあつそめて暑う那  
形山より市のものちり 夏の月

沖給 懸 雲峯 夕立

飛人の凱陣よりそ 沖まきに  
懸賣所阿字と波のゆる耳もる  
乃ゆさかといつり日あり雲の巻  
夕立やお合傘を晴くころ

納涼

岩はくふらつら夕まきえ  
涼しくや寺を暮るおきころり  
木後出落る波のちりゆかき

糸奈川谷

ふとこゆへ入る帆あり夕すそ

白隠禪師相見 籠花寺

涼しくや富士と和尚と田子お浦  
まのあつら飛りく富士を 涼源

下紐

下紐の園を係母や 申さるらん

麻竹の田家よりて

牛馬のあつてもあつぬ夕ま

日条河原

風涼く扇のさきふ涼家よ

不忘山

かゝる日もるるをさるの山涼く

涉後

人きく珠見えたり 涉後川

秋之部

立秋

一葉

秋の川や一ひら 西に 雲下より

虫の音に下崩安やと物乃珠

忘るは秋の川物ましくう那

暦はと音くく相の一葉ありな

系ききて珍うもあつや相の秋

七夕

明やすきさ露降はまらん 星 却と秋  
鶴や櫓よりあやうてとせつりし

仙府のんくりてめしれ

虫居しと星の一粒よまらぬらん  
七種や葛よりうらめえ 秋よりあ

秋原

葬や秋と物くく 何とれあり

我りのよふ折とまひし 女帝花

まろちうり

まろの井や石を子病よ志のみくさ

暮の花嵐ののちをさうりうれ

淋しさの物くうれ家すくたうな

るまあるもかくてふさひし 烏 瓜

魂糸 燈籠 躍

世の中や朝もくさくはまきつり

人のせくあしありはくまきつり

あくと松小秋あり 言 燈籠

燈篝やまをどつろく方風の初  
秋風や人まのあやしく躍る那  
飛く耳旅人馬をよむとりま

稻妻 蠢 鳴子 添ぬ

稲つまや園まへ渡りふ破の冥  
いふつまや桂の秋風のあやしくま  
刈跡の落よまらるいふこり那  
活く居る身のうらや鳴子引

秋風のあやしく切ると添ぬる那

存細うこりて減して添ぬる那

稲 駿府竹林精舎  
はあろ推せよ花や又器一を

紫陽花と又器又盛るをまらる  
この二方と父母うらや

刈のうら回つても焼く又器一を

虫

十をうり耳ある秋なり虫乃と急  
虫のあやるやわしりけり虫

冬瓜の揚き河形 きりくす  
頻や蝶を浅まは 秋の聲

秋風

秋風やうらそあるりか一葉ころり

秋風や 片羽はふ 胡蝶う那

秋風

山を記え川あつれあり 秋のうま

仙臺志多之庵別

名とり川畑ありれり 素乾ありて  
あつれあり人の面影もあひあり

跡はるりあるさと持ぬ 秋のうま

秋浦吟

秋風や 蝶もあひくをれまき

必親ま人の宗真よ 春日の残葉と忘れ持

于るあり 體り来り 秋乃かま

秋柳 花野 秋夜 露

いそりや 柳ひさしき 柳

あつれ 柳まけりあつれ 花野

合款の本 花柳あつれせん 老の秋



白露の果をありと里と六玉川

秋香 蕎麦花 蔓椒 瓢柿

乃向を一里くと秋のらん

陸はさよのゆも見え秋の香

蝶々の目も最後や蕎麦花

似珠の糸をあらしとくくじ

うくくくまの花のつるあくへそ

相荒く耐めく柿の木末くれ

層 小鳥 待宵

初丁や小車と落葉あめく

初よりの二羽もくぬきもあ

あしきくはくそくあすや千春

下総浦伝といひ二首

初風や小雀のさゆりもはく

鶺鴒や潮来ぞへて岩はく

自らあつるは葉且温風の山よりと送る

月影時そくく向ふそあらしむけ

良夜

十六歌

初夜

月とあそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は

十と衆やあそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は

名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は  
 名月あそく月不月山の入秋は

女房と権首持りりりりりり  
半分とまるとささくさくさく  
竹素とく枝焚者のかきとれ

菊

昔くくくあのもさくさくさく  
そのいそは客と真まると白菊と  
砥城新松多きとや菊はくく  
あのをあまうらうらうら  
祖乃菊

木曾路

あこととふ 祖父める菊の山路

後月 葛妻 草 く結

若くする菊はあやや 十三歌

懶はくぬらみ 野あり 後の月

金沢まで

隈くま海士の焚火や 十三歌

新蕎麦とくそくそ益の後の月

新そくそくそくそく結る 持の音

茸物や月の干潟の小松を  
うゝ枯や迎ぬあまた丸木檣  
うゝ枯や月の夜よりも星のあは

紅葉 庭

九月廿五日申より舞山のあきうれ  
掃帚も雪へそよよひー夕ぬ家  
秋落くくけそくき葉のあはれ  
是よりくくく年波よせる庭うれ

友野氏の巻眺橋うれ

たまゆしき長月比花火うれ

麻 新酒 濁酒 落水 九月尽

麻 新酒や子酒よおろそまの川

山紫と子種の候ふれ

新酒あり鴉の都の雨をせん  
隈あきせのこむおれみらう海  
帆のうふその舟あけり落し水  
秋風とまうりの出帆入帆

冬之部

初冬 時雨

初冬此 撥り入り也 さらさら  
桂あり松よきありや初しりれ  
秋風と 義なりこの初時  
色久ぬ 義ありふあなり初時  
雪の 笠さうしりりさうしりれ

小春 十夜 口切

山と今 樵夫の 笑ふ 小まう那  
牙 返る 目まきとく 初く 小まう那  
我 多しと 婆とくよ ちりたる 十夜  
口切や 苔此 價小 唐ありと  
落葉 枯柳 冬牡丹 枯柳 鮫鱈 冬牡丹  
又まの 才ありとく 目まきとく 初く 小まう那  
枯柳 花此 飯小 けしりり  
富りともありとく 目まきとく 初く 小まう那

牛の尾張弁をうこうぬ指形うろ  
夕ぐれの藻のそら火やとそら火  
戻と年先何結んぬ也まあり  
帰花巨燧 風水仙歌巾紙子袋  
あけてきる境まの木の芽をぬり花  
隠るる次戸おとよこころ  
と飛して巨燧も園よある歌  
本くじや形田外、その六月即ち

河井の名うた流次 あり仙苑  
きつう猿と先月彌々 双巾うれ  
傾城の市やうろれて 既巾うた

客は平日の果せぬまの果せぬまの

客は来々 我小喜わろ 紙子り船

老常集

戸うぬと我錦 ちうり 紙子すぬ  
菜大根を箱見ん、老を甲ありん

細代書 暖き 教見せ 髪並

世より世のまじきくや 網代うれ  
所とせぬらもめいさぬらおとせ  
つる時と一をん 遊るやめく免る  
顔見せやぬ粉白粉も菊のあ  
髪をさや 印と死さける肩と肩ま  
あか 水 流る 炭 措火 水 考  
滅立の門多く なる 衆の衆  
障子もろろろ ぬらやを川水

一粟してハ入日乃 水推り那  
更る衆や 衆もて 衆をさくさ  
あこの火や 衆よ流るる 衆ひしを

水考 衆

衆考 衆ちさりや 衆の右記より  
子多時衆や 名月如照のし  
友見えて 月衆の 衆 衆一以衆  
吹上り 衆らより 衆ちより 衆

雪 雑歌

とゆひせ月なれそ風あり秋の雪を  
 降らうそ雪のおもやあくらほ  
 雪てけ雪おろくや雪の川まの  
 雪折川雪川掉さす小舟の  
 白雪の中は折とりのそ飛ぶる  
 以の如雪さうくしておまの雪  
 降たつき月夜を月をえそ衣あがり

懸掃

もみぢ義のこをみ懸りし掃所  
ちく居せうのしき

神の雪は義もゆくそく拂

年内立春

夜半より心年とせれ井へけう家

降くり雪あふ志のひまよむとく  
持える雪居のふら

云はと處山はぬやどくのらそ

我等の戸は雪風の舞よりくまて麋鹿の  
捨ひとまこみ猫よりくま

金銀の雪よりおこる師まらる



浮破利の珠より山を源をた

節分多巻 宝船

鬼ハ介月を月へとめり想を

厄拂 跡をらぬとき 月夜を

きくく 松嵐出 あくぬ一乃を

可し望そくみやまの月をこより  
さすくふあなを放ぬるこそ

風鈴ときくく 時中くれ名跡を

江戸本石町十軒店 萬笈堂英平吉藏

其角發句集 二冊 嵐雪句集 二冊

蓼太句集 六冊

俳諧文集 二冊 蟹守大人輯  
高村言名の俳人の文を輯

叢句古今撰 三冊 同輯 附葛里連句集

俳諧新五百題 二冊 護物大人輯

新五百題 後編 同輯

二冊

發句類聚 蓼松大人重校

二冊

發句類題 雪中菴火人輯

二冊

發句五百題 白雄房撰

二冊

俳諧恋の志とるま 律雪庵北元大人輯

二冊

この志とるまは是迄季考のよき恋の形あるとふよりして  
恋の詞とるまに集む

能譜多焼灯 季考の書と

二冊

袖のくさ 季考懐中小本

一冊

俳諧四季名奇 懐中本落葉摺  
季考大成より

一冊

俳諧季考後編人 懐中一牧摺

萬葉用字格 春生上人撰  
万葉集の形を以て

一冊

定家卿の形巻

一冊

今古の形を

高井八穂大人輯折本

一冊

尚古の形を

山本明清大人輯折本

一冊

対照の形を

若波の大人輯折本

一冊

音便撮要

喜望上人輯懐中本

一冊

子鳥の跡

中臣親満大人輯

一冊

此のあと色紙短尺の書とそがも腰紙  
からいれた人の書と筆よりうらうらうら

